

小学生4人が3年間ベルマーク集めて寄贈

「世の中に貢献しよう」大人に頼らず活動

3月初め、東京都新宿区に住む小学6年生のグループ「ベルマークジャパン」から、財団に寄贈マークが届きました。手紙には「僕たちは約3年間マークを集め、世の中に貢献しようと思いました」とありました。小学生が大人の手を借りずにベルマークを集めて寄贈するのはとても珍しいことです。

3月18日、卒業式を間近に控えたメンバーたちに話を聞きました。区施設に集合したのは、田畑裕理(ひろみち)さん、田畑智脩(とものお)さん、榮(さかえ)真乃介さん、浅井碧生(あお)さんの4人。裕理さんと智脩さんは双子で、弟の裕理さんが代表です。

活動のきっかけは3年前の夏頃。4人の学校はベルマーク活動が休止状態でしたが、4年生だった榮さんは自分で調べて寄贈マークの存在を知り、ノートにベルマークを切り取っていました。そこに同級生の裕理さんが声をかけ、「楽しそう」と一緒に集めることにしました。その後、智脩さんも協力するようになり、クラスで仲の良い浅井さんも誘いました。

5年生になった後、みんなは「グループ名をちゃんと決めよう」と話し合いました。そこで決まった名称が「ベルマークジャパン」。考案者は裕理さんです。「ベルマークという言葉は宣伝になるし、入れたかった。ジャパンは……なんとなくかな」

友人や家族、塾の先生の協力も得てマークを集めていたのですが、6年生に進級した2020年度はコロナ禍に加え、中学受験も控えていました。「でも、集めるのをやめるのは悲しい。行事はつぶれたけれど、せめてこれだけは続けていこうと思った」と裕理さん。榮さんは「友



①「ベルマークジャパン」のみなさん。右から、榮真乃介さん、代表の田畑裕理さん、田畑智脩さん、浅井碧生さん②きちんと仕分けられたマーク
③取材日は3月18日。裕理さんはスケッチブックに「最高な1日」と記した

達が『これからも集めるね』と言ってくれた。みんなの後押しがありました」と話します。

そして2021年3月、いよいよ財団にベルマークを送る日が来ました。郵便局の窓口で裕理さんが封筒を提出する間、外で待っていた他のメンバーは「ここで失敗したら今までの努力が水の泡」と、両手を合わせて祈っていたそうです。こうして無事、財団に届けられたベルマークは、会社別にきちんと仕分けられていました。

4月から中学生ですが、それぞれ別々の学校に通うそうです。「みんなで集めたことは忘れない」(裕理さん)、「この4人だからこそ集められた」(榮さん)、「ベルマークを集めると少しでも社会の役に立てる」(浅井さん)、「ベルマークで生まれた絆もあり、達成感も大きかった」(智脩さん)。

そして口々に「新しい友達とベルマークをまた集め続けたい」と語ってくれました。

大阪・常盤小、4年連続で優秀賞

ベルマーク便りコンクール2020

日本一の超高層ビル「あべのハルカス」から徒歩約10分。大阪市阿倍野区の市立常盤小学校(三島公德校長、児童1256人)は、周辺の再開発で年々児童が増えている、大阪でも屈指の大規模校です。2020年度のベルマーク便りコンクールでは4年連続優秀賞に輝きました。

コロナ禍の緊急事態宣言が関西で解除された3月前半に同校を訪ねました。ベルマークを担当するPTA学級委員会の、久々の活動日です。

児童のベルマーク委員会が回収・仕分けしたマークを集計していきます。通常は2学年ずつ担当月を設けていますが「無理のないよう、ゆるく運用しています」と委員長坂本慶子さん。見ていると、先に作業を済ませて帰る人もいれば、あとから教室に入って来る人も。そのたびに坂本さんが「初めてですか?」と優しく声掛けして要領を伝えていました。

お便り「ベルマーク通信」は、ほぼ毎月発行しているのが大きな特徴です。長年お便りを作ってきた吉岡由枝さんは、お子さんは昨春卒業しましたが、現在もボランティアとして学校に来ています。最後の年度は「パソコンを使えない人が委員になるかも知れない」と、すべて手書きで発行したそうです。

コンクールの賞金が計10万円たった昨年は、感謝の気持ちを込めて全児童に消しゴムを贈りました。「ベルマーク協賛会社のクツワの製品に手作りシールを貼って配りました」と坂本さん。今回の賞金も子どもに還元できる形を考えていくことにしています。

学校もベルマーク運動に協力的。校舎入り口にはマークを会社別に入れる引き出しが設置されていました。「収集日以外でも、児童が持参したマークを入れられるよう考えました」と教務主任の中川敬吾先生は話します。



④常盤小のみなさん。前列左から教務主任の中川敬吾先生、坂本慶子PTA学級委員長、吉岡由枝さん
⑤児童に配った消しゴムに貼ったシール
⑥ハルカスからも常盤小が(写真上部)

ボールを蹴って、長縄跳んで…支援品を活用

福島県の田村市立都路小、楡葉町立楡葉南小・楡葉北小

2020年度の東日本大震災支援対象校のひとつ、福島県の田村市立都路小学校(安瀬一正校長、児童44人)から、支援で購入したターゲットマット付きミニサッカーゴールと、元気なポーズをとった子どもたちを収めた写真が、ベルマーク財団に届きました。子どもたちはボールが通った点数を数えながら楽しんでいるそうです。

2月にあった福島沖の地震で田村市は震度5強を記録。給食センターが被災し



て給食が出なくなり、弁当持参に切り替えたそうですが、学校自体には大きな被害はなく、子どもたちも落ちついていたとのことです。

同じく福島県の楡葉町立楡葉南小学校・楡葉北小学校(堀本晋一郎校長、児童100人)からも感謝メッセージと写真が届きました。購入したのは10メートルの長縄4本など。2月の「なわとび月間」ではこの縄も使い、学年単位で長縄跳びの練習に励みました。

両校は2022年度に学校統合する予定です。2月の地震は、楡葉町では震度6弱を記録しましたが、被害はなかったとのことです。オリンピックの聖火リレー

がスタートした3月、町内の出発地点では3年生の子どもたちが、地元に伝わる「天神太鼓」を演奏して盛り上げていました。

